

ある出会い

萩野脩二

1923年11月27日、夜の9時、謝婉瑩即ち謝冰心は、病に倒れた。すぐさま、学内の病院・シンプソン療養院に入院させられた。

彼女は、9月中旬、留学先のアメリカ・マサチューセッツ州にあるウェズレー学院に着いたから、アメリカに来て、僅か2カ月余のことである。

これ以後、冰心は1年ほどの療養生活を送らざるを得なくなる。この経験が、冰心の人生と文学に、大きな影響をもたらしたに違いないというのが、私の考えであるが、今ここでは、ごくささやかなエピソードを挙げて、近代東西言語文化接触研究会が出す『或問』創刊号の、お祝いの文章にしようと思う。

上述のように、冰心は、11月27日の夜に入院させられたのであるが、そのニュースはすぐさま、彼女が住んでいた寮全体に知れ渡ったらしい。翌日には、冰心によれば、寮内に住む96人全員が手紙やメモを寄越したという。直ちに彼女は面会謝絶となったが、その後も、病状を気遣う電話や見舞いやお花がひっきりなしに続いたという。彼女の病室は花で一杯になった。

私は、女子学生のことには疎いが、同じ寮の者が病気となれば、このように皆が気遣うのであろうか？中国という異国からの留学生であったから、優しい乙女達の関心を引いたのであろうか？日本においても同じであったかもしれないが、私には、その全面的なことと早さが、やはりアメリカ的なような気がした。

冰心はまた、次のように書いている。

一个美国朋友写着：“从村里回来，到你屋去，竟是空空，我几乎哭了出来！看见你相片立在桌上，我也难过。告诉我，有什么我能替你做的事情，我十分乐意听你的命令！”

又一个写着说：“感恩节近了，快康健起来罢！大家都想你，你长在我们的心

里！”

但一个日本的朋友写着：“生命是无定的，人们有时虽觉得很近，实际上却是很远。你和我隔绝了，但我觉得你是常常近着我！”

中国朋友说：“今天怎么样，要看什么中国书么？”

都只寥寥数字，竟可见出国民性——一夜从杂乱的思想中度过。

《寄小读者——通讯9》

私には、ここに述べられている、アメリカと日本と中国の国民性の違いは、大変面白く、且つ、的確なような気がした。

なるほど、中国のそれは、直接的で物質的と言えるではないか。彼らは、いつも中国なのだ、とも。

そして、アメリカ人の率直さも良く現れている。言い方も巧い。ウイットに富んでいる。

ここに日本人が出てくるのは、意外であった。この「朋友」が誰であるかにつき、私は昨年の9月、福州で開かれた学会で、瀬尾すみ江という津田塾大からの留学生であろうと推定したが、卓如という中国の文学研究所を退職した女性の冰心研究家は、早くから瀬尾であると断言していた。

日本人の言い方は、いかにも持って回った言い方である。

だが、“命は定めなきもので”で始まり、“貴方と私とは離れておりますけれど、いつも近いものと感じております”で終わるこの手紙は、極めて抽象性に富んでいて、並の者の手紙ではないと私には思える。日本人のわかりにくさだけではない、知的なひらめきが、ここには感ぜられる。

この手紙の引用は、従って私には、単なる国民性の比較のためであるよりは、冰心が瀬尾すみ江という日本留学生の手紙を理解し、彼女の心を受け入れたことを表明している箇所であると思える。ここは、冰心が瀬尾の抽象能力を理解し、彼女を心の「朋友」と意識した出会いの場所ではないだろうか。

日本と中国とが平和裏にあったとは言えない時代に、アメリカで一組の日中の知性の交流が始まった。それは、政治、社会、軍事に対しては無力ではあったが、文化を体現する人への尊敬の念を持った心の交流として、息長く続いたのであった。

(2000.9.28)